

### 3. 検査業務におけるAI活用の実際

## 1) 診療放射線技師が生成AIと歩む 3つのステップ

### — 日常業務の効率化から 臨床支援アプリケーションの開発まで

箕輪 綱平 亀田総合病院画像診断室

#### 生成AIは診療放射線技師の「相棒」になりうる

診療放射線技師の業務は年々複雑さを増している。CT、MRI、血管撮影、核医学、放射線治療などモダリティは高度化し、被ばく管理や医療安全、電子カルテとの情報連携、患者説明、若手教育、勤務調整など、撮像以外に求められる役割も広がっている。

一方で、日常業務に追われる中で、新しい知識を学ぶ時間や、業務改善にじっくり向き合う余裕を確保することは容易ではない。現場には「もっと効率化できるはずだ」と感じながらも、日々の業務に流されてしまう課題が数多く存在している。

こうした状況の中で、生成AIは、単なる文章作成ツールではなく、診療放射線技師の思考を整理し、学習を支援し、現場の課題を形にするための新しい相棒になりうる。

ただし、人工知能(AI)を使えばすべてが解決するわけではない。むしろ、便利だからこそ注意すべき点がある。AIが作った答えを理解しないまま使い続けると、成果物だけが増え、自分の理解が追いつかなくなる危険がある。筆者は、近年のIT分野でAI生成コードのリスクとして指摘されている「理解負債(comprehension debt)」という概念<sup>1)</sup>が、医療現場にも通ずる視点であると考えている。この視点は、当院の放射線科医である町田洋一氏とのディスカッションから示唆を得たものである(理解負債につ

いては後述)<sup>2)</sup>。AIに任せるほど仕事は速くなるかもしれないが、「なぜそうなるのか」を考えなければ、専門職としての判断力は育たない。

診療放射線技師に求められるのは、AIをブラックボックスとして使うことではない。自らの専門性を高めるための対話相手として、主体的に活用する姿勢である。本稿では、生成AIの活用を、「まず聞く」「出典を確認しながら学ぶ」「現場の課題を形にする」という3つのステップに分け、筆者の実践例を交えながら紹介する(図1)。

#### 医療現場でAIを使う前に確認したい3つの原則

医療現場で生成AIを活用する際には、利便性だけでなく、安全管理とリスク管理を同時に考える必要がある。厚生労働省の「医療情報システムの安全管理に関するガイドライン第6.0版」<sup>3)</sup>では、医療情報を扱うシステムにおける安全管理の重要性が示されており、総務省・経済産業省の「AI事業者ガイドライン(第1.2版)」<sup>4)</sup>でも、AI利用に伴うリスクへの対応が整理されている。これらを踏まえると、患者の個人情報を入力しないこと、AIの出力を鵜呑みにせず確認することは、医療現場で生成AIを使う上での最低限の前提である。

その上で、筆者が現場で意識している原則を3つ挙げる(図2)。

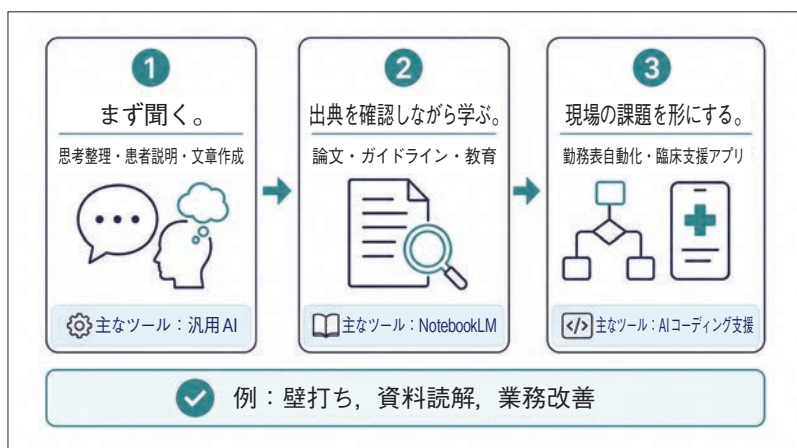


図1 生成AI活用の3つのステップ  
AIに委ねるのではなく、対話しながら活用する。